雪の日

白黒箱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪の日

【Ｎコード】
Ｎ００８３Ｏ

【作者名】
白黒箱

【あらすじ】
なんてことのない、ただの雪の日の朝。

（前書き）

とりあえず、テスト投稿がてらの品です。

ドアを開け一歩踏み出すと辺り一面に雪が降り積もっていた。
銀世界という言葉があるがきっとこのコトを云うのだろう。
目の前の光景に見とれながら僕は歩きだす。
サクサクと雪の沈む音が耳に伝わり、静かな朝響き渡る。
道の脇には子供たちが作ったであろう雪だるま、のようなモノが並んでいた。
ただの雪だるま、というよりは角が着いていたり少し形も歪んでいたりするから雪だるまのようなモノ、だ。
アニメや漫画のキャラクターなどを再現しようとしたのだろうか。
それとも面白がって改造しているのだろうか。
子供の想像力は、創造力は大人のソレを遥かに越えていて、純粋で、素晴らしい。
今となって失ってしまったその力が羨ましく思える。
慣れない哲学チックな事を考えよそ見をしていたからだろうか。体がふと自由を失う。
突然の浮遊感、脇に見える朝日に輝く氷が反転する、澄んだ空が仰ぎ見える。しかしそれも一瞬のこと。
道には鈍い音、頭には鈍い痛みが響く。

（さっそくやってしまった。）

足元は凍っている、注意しなければ転ぶ可能性が高くなるのはあたりまえだろう。
体中、得に後頭部に痛みが残るっている。
本来なら立ち上がって雪を掃っているのに、今はそんな気分にならない。
痛くて体が動かせないわけではないが、まったく動く気にならない。

背中の雪はひんやりとして気持ちがいい、というには少し冷たすぎる。
誰かが通り掛かったら怪しまれてしまいそうだが、今この場所で両手を広げている横になっている状態がなぜか僕に充実感を与えてしまった。
少し時間が経ってからゆっくり起き上がり雪を落とした。
もうすぐ電車が来る時間だ。余裕を持って少し早く家を出たつもりが、ちょっとした子供心でギリギリになってしまった。
僕は雪に作った自分の体の跡を背に少し頬を緩ませて小走りで駅へ急いだ。
これからどれ程の人が、自分のように跡を残すのかな。

（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0083o/

雪の日

2010年10月10日13時19分発行